
そして赤眼は嗤う

si-ta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして赤眼は嗤う

【Nコード】

N1227Y

【作者名】

s i - t a

【あらすじ】

「日が沈んだら外へ出てはならない」 人々は夜になると決して家から動かない。幼い子供だけではなく大人も同じ。夜の世界は最早妖たちのものである。一方で、夜の闇へと出て行く人間もいる。妖退治を生業とする者たちだ。林の中で不気味に光る、十とも百とも知れない赤い目。符術師を中心に、彼らは夜毎に妖と戦っていた。

序 鞠をつく少女

とん、とん、とん、とん、とん

少女は鞠つきをしていた。鞠が一定の調子で弾むのに合わせ、綺麗に切り揃えられたおかつぱ頭も小さく動く。

年齢はまだ四、五といったところだろうが、少女は利発そうな顔立ちをしていた。年の割にはどこか大人びている。目尻の長く切れ込んだ目元で長いまつ毛が揺れる。鼻筋は真つ直ぐに通っており、唇は少し小さい。肌は極めて白いが、うっすらと紅く染まった頬のおかげで健康な印象が見受けられる。あと十年も経てば、さぞかし美しい娘に成長することだろう。

「千代子」

少女に向かって呼びかける声がした。千代子と呼ばれたその少女は鞠をつく手を止め、顔を上げる。彼女が見た先には一人の老人の姿があつた。少女の顔がぱっと華やぐ。彼女の手から離れた鞠はころころと転がって、少し行ったところで止まった。

「爺じい！」

少女は嬉しそうに声を上げ、老人の元に駆け寄る。その勢いで抱きついてきた孫娘の頭を、老人は優しく撫でた。

「千代、続けて百も鞠つけたんよ。爺にもあとで見せたげる」

「千代子はすごいのう。千代子は鞠つきの天才じゃ」

一人で鞆をついていたときは妙に大人びて見えた少女も、今は幼くあどけない表情を見せていた。少女が笑う。それを見て老人も微笑む。

「千代子や、暗くなる前に、そろそろ帰ろうか」
「うん」

老人は少女の手を引いて歩き出そうとした。

「あ、爺、待って……」

何かを思い出したように声を上げ、少女は鞆を拾いに向かう。彼女の後ろ姿に向かって老人は声を掛けた。

「千代子」
「なあに？」
「鞆はいいから、もう帰ろう」

老人の言葉に、少女は不思議そうに首を傾げた。

「さあ、早く帰ろう」
「でも、爺……」
「千代子」

老人が声を強める。柔和さに変わりはないが、どこか有無を言わせない響きを帯びていた。少女は仕方なさそうに、祖父の言葉に従って鞆を捨てることなく引き返した。

「いい子じゃ、さあ、帰ろうか」
「うん！」

いつまでも駄々を捏ねることもなく、少女と老人は手を繋いで歩き出す。そうして夕暮れの中、二人は林道へと消えていった。

周囲の闇が濃くなるにつれ、老人の瞳の色は変化していった。それは血のように赤い色をしていた。

その後、少女の姿を見た者はいない。

一 今宵も彼らは妖の世界へ

この世界には妖あやかしと呼ばれるものが存在する。それは神であり、死霊であり、妖怪であり 形や呼ばれ方は様々だが、目に見えない非合理的な存在の総称である。

妖は御妖おんようと憑怪つきものに大別される。一言で言ってしまうえば御妖とは良い霊、憑怪とは害を齎す霊のことである。憑怪は御妖対になる形で下妖げようと呼ばれることもあり、御妖を神霊、憑怪を悪霊と表現する場合もある。良い霊、害を齎す霊と手短に言ってしまったが、人間に迷惑を掛ける御妖もいないわけではない。御妖の第一とも言える神として、一度その逆鱗ひとたびに触れようものなら恐るべき相手となる。

御妖と憑怪の違いは瞳の色や瘴気を纏っているかどうかにある。憑怪の目は赤い。鮮血のように濃く、鮮やかな赤色をしている。そしてそれは光を放っていることも多い。妖が姿を現すのはそのほとんどが夕暮れから明け方であるが、闇の中では特にその赤色は目立つ。御妖の中にも赤い目を持つものもあるが、大概のものは別の色である。若しくは目を持っていない。瘴気というのはとは害のある気、という意味である。程度は個体によって異なるが、その存在だけで人畜に害を齎す。瘴気を放っているのも憑怪の方だ。瘴気の厄介なのは、気を感じる力、すなわち霊感が強い人間にしかそれを感じることができないことだ。そもそも霊感を全く持たない人間は妖を見ることができない。勿論、見る、感じるということができない人間であっても害は受ける。

しかし、御妖と憑怪の最も大きな違いは、それらを殲ころすことが許されるか否かということである。憑怪はどのようにに始末をつけようが問題ない。一方で、御妖を殲すことは古来から禁忌とされている。

その御妖を正統な手立てで弔い、滅する力を持つのが『符術師』である。

*

ある夕暮れ時の一風景。

「出やがったな、化け物！」

少年は威勢良く声を上げた。着流しに灰色の帯を締めている。黒々とした髪はその硬さを示すように上を向いていた。顔立ちにはまだ幼さも残るが、浅黒い肌と彫りの深い目鼻立ち、きりつとした太い眉も相俟って、男らしい精悍な印象を与える。

彼の視線の先にいたのは、ゆらゆらと蠢く大蛇だった。地を這うのではなく、空中を漂うようにして徐々に少年に迫る。その輪郭は臃^{おぼろ}で、ひと目見ただけでも何か異様なもの。つまりは妖だということが分かる。

少年は腰に差していた日本刀を抜き、妖蛇に斬りかかろうとした。

「禁」

凜とした少女の声が響く。それと同時に少年に向かって飛んできたのは一枚の御符だった。白い紙に墨で経文らしき文字が書かれている。

その御符が少年の背中に触れた瞬間、その文字の羅列が青白い光を放ち始めた。

「うわっ！」

少年は刀を握りしめ、前傾姿勢のまま動きを止めた。いや、正確には止められたのだ。

「未だに御妖と憑怪の区別もつかないとわね。恥を知りなさい」

先程と同じ、凜々しい声が後方から聞こえた。その声の主は巫女装束姿の少女だった。白衣びやくえに緋色の袴を履いている。腰まで伸びた黒く美しい髪を紅い紐で纏め、前髪は真ん中で左右に分けていた。そこから透き通るように白い額が覗く。吊り気味の奥二重の瞼に、綺麗な弧を描く細い眉。鼻は少し低いが、小さく整った形をしている。肌の白さが薄い唇の紅さを引き立たせていた。白く細い手首には数珠を重ねて付けている。

「何すんだよ！ 最近この辺りで人襲ってるのこいつだろ！ 下妖じゃねえのかよ！」

「五月蠅い。黙りなさい、下衆が」

はぁ、と溜め息を吐いてから少女は言った。言葉はともかくとして、その吐息からは妙に上品さを感じられる。

「げ……す！？ て、てめえ何様だ！ 下衆って……おい！」

少年は声を荒らげた。しかし言うまでもなく、彼はまだ体の自由を奪われたままだ。巫女装束の少女の方を振り返ることもできないまま喚いている。

少女は何も言わず、少年に並ぶように前へ出た。懐に手を入れ、先程と同様の御符を一枚取り出した。経文らしき文字の羅列があることは同じだが、今回のものは紙自体がやや黄色みを帯びている。

人差し指と中指の二本で御符を挟み、少女は揺らめく蛇の影を真っ直ぐに見据えた。その眼差しは睨んでいるわけでもないのに鋭い。この視線を向けられたら大方の人間は少なからず怯むだろう。

「
弔符ちよつぷ」

滑らか且つ無駄のない動きで御符を蛇に向かって飛ばす。御符が触れた瞬間、経文が光を放ち始め、その光は妖蛇を包み込んだ。そして数秒の間青白く光り輝いたかと思うと、妖蛇は跡形もなく消えていた。

妖を事無く片付け、少女はゆっくりと息を吐いた。

少女の名は五條ごじょう絢音あやね。現在十六歳の五條家の末裔だ。五條家は、幾つかある符術師の家系の中でも特に力の大きい『蓬萊ほうらい式織しきあり』の血筋とされる。ただし遙か以前に分家として蓬萊家の直系からは外れ、現在では符術師の血も薄くなっている。その中で、彼女 五條絢音は符術師としての高い能力を持っていた。

「……つていい加減放せよ！ おい、聞こえてんのかよ!？」

荒っぽく声を上げたのは符術で身動きの取れないままの少年だった。彼の名は高平たかひら喬吾たけご。絢音と同じ十六歳。彼女と共に妖退治を行う仲間の一人だ。といっても、彼が絢音と出会ってからまだひと月にも満たない。

符術師は妖退治を務めとする。しかし彼らは単独で任務につくことはなく、数人の集団 一般に『斎刺客せきかく』と呼ばれる 形成して妖と戦う。斎刺客には御妖を弔うために符術師が一人はいる。「一人は」というよりも、「一人だけ」といった方が適切かもしれない。本来妖を退治するのは符術師の役目だが、符術師の数だけで妖に対抗するのは不可能だった。それを補うために靈感と戦う術を持つ人間が、符術師と相伴う形で斎刺客を組む。喬吾もその一人だった。

絢音はゆっくりと喬吾の方に顔を向ける。暫しの間彼に冷めた視線を当て、口を開いた。

「聞こえてるけど」

「だったら早く放」

「人に物を頼むなら言い方を弁えなさい」

「て……てめえ、上手に出やがって……」

喬吾は絢音を睨み付けた。それなりに自尊心の高い彼にとって、自分の身の為でも絢音に諂うのは気に入らないことだった。一方の絢音は涼しい顔で喬吾を見ている。

そんな二人の後方に近付いてくる人物の気配があった。それに気付いた絢音はちらりと後ろを振り返る。喬吾も目だけをそちらに向けた。

「申し訳ありません、遅くなりました。おや」

その人物は二人の様子を見て、一旦言葉を止めた。紫紺の着流しに黒い帯を締めた細身の男。眼鏡の奥の穏やかそうな瞳が絢音たちを捉え、瞬きをする。上品な顔立ちをした優男風の人物だった。名は藤堂和臣。非常に落ち着いて見えるが、まだ十九歳の青年だ。彼もまた喬吾と同じく符術師ではない。弓の名手であり、妖と戦うのにも弓矢を用いている。

絢音たちの斎刺客は符術師である絢音、喬吾、そして彼、和臣の三人だった。斎刺客は四、五人で形成する場合がほとんどであることを踏まえると、三人というのは少ないと言える。

「絢音、術を解いてやりなさい」

柔らかな声で、絢音に言葉を掛けた。絢音は和臣を見遣ってから、表情一つ変えずに喬吾に視線を移した。

何の前触れもなく、喬吾に掛かっていた符術「禁」が解ける。前

のめりのままの喬吾の体は、地球の重力に逆らうことなく、ごく自然に上半身から地面に叩き付けられた。

「へぶつ！ いったえ……！」

「大丈夫ですか、喬吾？」

「大丈夫よ」

「お前が言うな、大丈夫なわけあるか！」

そうしている間にも日は沈んでゆく。いつの間にか空には細い月が弱く光り始めていた。

「さて、と……すっかり日も暮れたことですし、そろそろ行きましようか。妖かれらとの戦いに」

和臣の穏やかな声が響く。戦いとは言っても、繰り返される日常の一部に過ぎない。三人はいつものように、妖の棲み処と化した夜の林へと歩いて行った。

彼らはまだ気付いていない。運命の歯車は疾うに狂い始めているということに。そしてその狂いは、今にも彼らに及ぼうとしていることにも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1227y/>

そして赤眼は嗤う

2011年11月4日17時13分発行